

平成 27 年度 卒業論文

加子母明治座の歴史絵本製作のための文化史調査

Research of Cultural History for the Picture Book about History of Meiji-Za in Kashimo

指導教員

名古屋工業大学 建築・デザイン工学科

藤岡伸子 教授

建築・デザイン工学科 デザイン系プログラム

平成 24 年度入学 24116057

日高史帆

2015 年 12 月 9 日 提出

目次

第1章 序章	1
1-1 研究の背景と目的	2
1-2 既往研究	3
1-3 調査対象と方法	4
1-4 明治座年表の概要	5
1-5 研究の流れ	7
第2章 加子母と明治座の概要	9
2-1 岐阜県中津川市加子母地域	10
2-2 加子母明治座	12
第3章 第一期「創建期」	14
I 明治座創建	18
II 用途の多様化	25
第4章 第二期「停滞期」	30
III 戦中	32
IV 戦後復興	36
V 農村舞台の衰退	46
第5章 第三期「再興期」	52
VI 明治座再興	54
VII 明治座の持続的利用	66
第6章 まとめ	76

謝辞

参考文献

付録資料

第 1 章 序論

1-1 研究の背景と目的

岐阜県中津川市の加子母地区には、約 120 年の歴史を有する明治座という岐阜県重要有形民俗文化財（昭和 47 年指定）の芝居小屋がある。東濃地方で地芝居が流行した明治時代に、地元住民が自ら発起し、資金と資材を集めて建設した。その後も住民が主体となって改修と増築を繰り返しながら、明治座は人々の娯楽の場として利用されてきた。現在も、加子母歌舞伎保存会による歌舞伎と、明治座活用委員会が主催するクラシックコンサートが毎年開催され、加子母内外から多くの人々が訪れ、地域活性化に貢献している。

しかし近年は老朽化が問題視されていた。平成 25 年 11 月に「加子母明治座改修検討委員会」が行った調査の結果、屋根は雨漏りを生じており、柱梁は構造安全上の問題があることが明らかとなった。この状況を踏まえ、平成 26 年 6 月に加子母地区代表と研究者ら¹により「加子母明治座耐震改修検討委員会」が組織された。検討委員会は精密な現状調査を行い、伝統工法による改修工事と、セメント瓦葺きの屋根から創建当初の板葺石置き屋根への復原を決定した。

復原に際して、明治座と地域の関わりに注目した歴史と、改修工事完成に至るまでの地域の努力の記憶を、記録として残す計画を立ち上げた。その一つが、文化庁の「平成 27 年度文化遺産を活かした地域活性化事業」²に採択された、明治座の歴史をまとめた絵本の刊行である。本研究は、文献調査と聞き取り調査に基づいた、絵本制作のための年表作成と、明治座の歴史を子どもたちに語り継ぐにふさわしいシーンの抽出を目的とする。

1-2 既往研究

CiNii Articles（国立情報学研究所論文情報ナビゲータ、<http://ci.nii.ac.jp/>）から、「農村舞台」で検索したところ、120件の論文が該当したため、その概要を検討した。それらの論文は、日本全国各地の農村舞台の研究、舞台建築の構造・音響・採光に関する研究など、様々な観点から農村舞台について述べていた。本研究の対象である明治座の創建と同時期である「近代」、同地域である「岐阜県」の農村舞台について述べている論文を選別したところ、以下の7件が該当した。

表 1-1 既往研究一覧

No.	タイトル	著者	収録誌	掲載ページ	出版社	掲載年
1	岐阜県の芝居小屋・地歌舞伎の運営体系(4.建築計画)	若原 唯子, 清水 裕之, 村山 顕人	東海支部研究 報告集 (52)	565-568	一般社団法人日本建築 学会	2014
2	地域経済の発展と近世農村舞台の展開: 芸術と生活の一体性とその変遷をめぐって	後藤 和子	文化経済学会 (日本)論文集 (3)	5-11	文化経済学 会	1997
3	地域社会における経済発展と文化形成 —明治初期の岐阜県東濃地方の劇場型 農村舞台を素材として—	後藤 和子	経済論叢別冊 調査と研究 11	5-18	京都大学経 済学会	1996
4	近世農村舞台の生成と発展	後藤 和子	経済論叢 158(1)	16-33	京都大学経 済学会	1996
5	岐阜県下農村舞台の研究:その存廃に ついて	橋野 邦仁, 藤森 敬一	学術講演梗概 集. E, 建築計 画, 農村計画	1037-1038	一般社団法人日本建築 学会	1992
6	近世における日本の農村舞台群につい て(歴史・意匠)	松崎 茂	日本建築学会 論文報告集 (63-2)	621-624	一般社団法人日本建築 学会	1959
7	3. 岐阜県各務の舞台:舞台構と客席構 について(農村舞台考その11)	松崎 茂	日本建築學會 研究報告 (37)	414-421	一般社団法人日本建築 学会	1956

これらの論文は、岐阜県東濃地域における農村舞台の歴史・地域産業との関連性や建築構造について書かれており、その特異性について知ることができる。しかし、本研究で扱う農村舞台と地域住民の関わりや、歴史資産に対する住民意識について詳細に記した資料は乏しかった。

1-3 調査対象と方法

関連書籍及び、加子母総合事務所が所蔵する文献・古文書のうち、明治座の記述があるもの（表 1-2）を調査の対象とする。また、明治座の主要関係者 18 名を聞き取り調査の対象とする。

まず、文献調査により明治座の歴史を整理する。その後聞き取り調査を実施し、歴史的事象についての詳細な話や、文献調査によって得られなかった出来事やエピソードを探る。そして、収集・整理した資料と、聞き取り調査を統合し、明治座の創建から現在に至るまでの出来事を時代順にまとめ、年表を作成する。明治座の歴史を日本史と関連付けながらまとめることで、その特徴と特異性を明らかにする。

表 1-2 文献調査対象

No.	書名	著者・発刊元	発行年
1	加子母村誌	加子母村誌編集委員会	昭和47年
2	加子母の歴史と伝承	加子母村文化財保護審議会	昭和58年
3	加子母の歴史と伝承 (続編)	加子母村文化財保護審議会	平成2年
4	愛すべき小屋	景山正隆	平成2年
5	加子母の農村舞台-明治座の建築と沿革-	加子母教育委員会	平成5年
6	加子母明治座耐震改修調査研究報告所	加子母明治座耐震改修検討委員会	平成27年
7	記録簿	古文書	明治26年
8	明治座管理規定	古文書	明治28年
9	加子母歌舞伎公演プログラム	加子母歌舞伎保存会	昭和48年～平成26年

聞き取り調査を行った人物を、表 1-3（次頁）にまとめる。表における満年齢は平成 27 年 12 月 2 日時点のものであり、地区名は加子母地域のものである。聞き取りの詳細内容は巻末資料にまとめる。

表 1-3 調査対象者（平成 27 年 12 月 2 日時点）

No.	名前	役柄	生年月日	年齢	出生地
1	田口森雄	明治座保護会元会長	昭和23年11月21日	81	中津川市加子母中桑原区
2	安江智夫	明治座の管理・案内役	昭和14年2月15日	80	中津川市加子母角領区
3	中島敏明	歌舞伎保存会会長	昭和10年11月23日	67	中津川市加子母小和知区
4	熊沢和美	明治座活用委員会会長	昭和13年7月5日	67	中津川市加子母万賀区
5	和田富郎	加子母歌舞伎役者	昭和15年12月8日	89	中津川市加子母下桑原区
6	安江利朗	加子母歌舞伎大道具係	昭和9年2月17日	77	中津川市加子母万賀区
7	田口敬助	青年団活動に参加	大正15年1月2日	88	中津川市加子母中桑原区
8	今井初雄	青年団活動に参加	昭和13年10月5日	67	中津川市加子母万賀区
9	梅田周作	青年団活動に参加	昭和39年10月17日	75	中津川市加子母下桑原区
10	吉村美枝	青年団活動に参加	昭和33年7月20日	77	中津川市加子母下桑原区
11	今井ゆみこ	青年団活動に参加	昭和23年12月3日	66	中津川市加子母万賀区
12	粥川孝美	青年団活動に参加	昭和48年1月28日	60	中津川市加子母中切区
13	熊沢和之	加子母村役場の助役	昭和23年8月22日	76	中津川市加子母万賀区
14	佐藤正	加子母総合事務所元所長	昭和23年12月22日	62	中津川市加子母万賀区
15	内木哲朗	加子母総合事務所所長	昭和2年3月18日	57	東京都
16	梅村琢	加子母総合事務所職員	昭和49年1月26日	41	中津川市
17	秦雅文	Iターン・デザイナー	昭和28年8月8日	51	兵庫県
18	本間希代子	Iターン・画家	昭和30年12月6日	42	愛知県

聞き取り対象者の選定にあたっては、まず、文献調査により聞き取りが必要と思われた項目を抽出した。（表 1-4）

表 1-4 聞き取り項目

No.	聞き取り項目
1	創建のきっかけ
2	創建期の使われ方
3	大正期の使われ方
4	軍需倉庫として利用されていたときの様子
5	青年団活動について
6	高度経済成長期後半の使われ方
7	加子母歌舞伎の復活
8	内木家当主について
9	実験開館に至るまでの経緯
10	Iターン者の活動について

そして、熊沢和之（旧加子母村役場助役）に聞き取り調査すべき人物について尋ねた。さらに、聞き取り時には、ほかに詳しい情報を知る人がいないか尋ね、聞き取り対象者を特定していった。また、持参した仮作成の年表に沿って話を進め、対象者のエピソードの想起を促した。

1-4 明治座年表の概要

年表には、日本の社会動向と加子母における出来事の、2つの縦軸を設ける。(表 1-5) 文献調査と聞き取り調査に基づき、明治座の歴史約 120 年を第一期～第三期に大別する。さらに利用方法と社会動向から区分 I～VIIに分ける。

表 1-5 明治座年表

元号	区分	日本社会の動向	明治座・加子母の出来事	
			事業・組織・公演	明治座利用例
明治	第一期 創建期 M26	I 明治座創建 M27 日清戦争勃発 M28 日清戦争終結 M37 日露戦争勃発 M38 日露戦争終結	M26 創建登記・工事着手 M27 竣工 「明治座管理規定」制定 こけら落とし	● 地芝居・興業芝居(ともに歌舞伎が主)
		II 用途の多様化 T3 第一次世界大戦 T7 終戦 T9 日本初のメーデー T11 全国水平社結成 T14 普通選挙法制定 治安維持法制定 S4 世界恐慌 S6 満州事変 S11 ニ・二六事件 S12 日中戦争 S13 国家総動員法 S14 第二次世界大戦 S16 太平洋戦争	T9 屋根の葺き替え (板屋根→瓦屋根) S7 明治座最後の地芝居 (以降地芝居の記録がない)	● 改革演劇・青年団の弁論大会 ● 興業芝居(歌舞伎・剣劇他) ● 無声映画 ● 音声映画
大正	第二期 停滯期 S19	III 戦中 S20 終戦	S21 明治座保護会結成 S23 沢村訥子・中村芝翫一行公演 (松竹歌舞伎) S26 守田勘弥・沢村訥子一行公演 (松竹歌舞伎)	● 興業芝居(歌舞伎他) ● 青年大会・小中学生演三大会 ● 音声映画
		IV 戦後復興 S25 文化財保護法制定 V 農村舞台の衰退 S34 伊勢湾台風 S39 東京オリンピック S43 文化庁の設置	S35 加子母最後の地芝居 (祭礼の際、公民館にて) (S48 加子母歌舞伎復活以前) S38 明治座最後の歌舞伎 (S48 加子母歌舞伎復活以前)	● 音声映画
昭和	第三期 再興期 S45	VI 明治座再興 S45 農村舞台の調査 S48 第一次石油危機 S54 第二次石油危機 S61 バブル景気	S45 文化財調査対象となる S47 岐阜県重要有形民俗文化財に指定 S48 加子母村歌舞伎愛好会発足 第1回加子母歌舞伎 S49 加子母村歌舞伎保存会に改称 S50 岐阜県日育教育文化賞受賞 (加子母歌舞伎) S53 岐阜県芸術文化顕彰受賞 (加子母歌舞伎)	● 音声バンドコンサート ● 地芝居(歌舞伎) ● 興業芝居(歌舞伎)
		VII 明治座の持続的利用 H7 阪神淡路大震災 H17 愛知万博 H20 リーマンショック H23 東日本大震災	H7 「森の交流大使事業」 H9 「山村芸術復興事業」 アトリ工村建設 H10 第1回クラシックコンサート H14 明治座活用委員会発足 実験的周年閉館開始 H17 中津川市と合併 H25 域学連携事業採択 H26 耐震改修・屋根の葺き替え (瓦屋根→板屋根)	● 音声バンドコンサート ● クラシックコンサート ● 連年閉館 ● 地芝居(歌舞伎) ● 興業芝居(歌舞伎)
平成				● 音声バンドコンサート ● クラシックコンサート ● 連年閉館 ● 地芝居(歌舞伎) ● 興業芝居(歌舞伎)

以下に各区分の名称と時期を記載する。

- 第一期「創建期」
(明治 26 年～昭和 18 年)
I : 明治座創建 (明治 26 年～明治末年)
II : 用途の多様化 (大正元年～昭和 18 年)

- 第二期「停滯期」
(昭和 19 年～昭和 44 年)
III : 戦中 (昭和 19 年～20 年)
IV : 戦後復興 (昭和 20 年～28 年)
V : 農村舞台の衰退 (昭和 29 年～44 年)

- 第三期「再興期」
(昭和 45 年～現在)
VI : 明治座再興 (昭和 45 年～平成 6 年)
VII : 明治座の持続的利用 (平成 7 年～現在)

※ 区分の切り替え要因

1-5 研究の流れ

本論文の構成を以下に示す。

【第1章】

本論文の目的と意義、調査対象と研究の方法について述べる。

【第2章】

加子母と明治座の概要について述べる。

【第3章】

明治座の歴史の第一期について述べる。

【第4章】

明治座の歴史の第二期について述べる。

【第5章】

明治座の歴史の第三期について述べる。

【第6章】

本研究の総括と今後の課題について述べる。

第1章 註

¹立命館大学教授鈴木祥之,同大学准教授宗本晋作,同大学助教授向坊恭介,名古屋大学教授佐々木康寿,名古屋工業大学教授麓和善,同大学教授藤岡伸子,金沢工業大学教授後藤正美,同大学講師須田達,京都大学教授藤井義久,鳥取環境大学准教授中治弘行の10名。

²文化遺産を活用することによる文化振興・地域活性化を目的として、文化庁が推進している。①地域の文化遺産次世代継承事業、②世界文化遺産活性化事業、③歴史文化基本構想策定支援事業の3つに細分される。明治座の歴史絵本の刊行は①に分類されている。

第2章 加子母と明治座の概要

2-1 岐阜県中津川市加子母地域

岐阜県中津川市加子母地域は岐阜県の東部、長野県との県境に位置し（図 2-1）、木曾川水系白川沿いにある中山間地域である。地域の北東部に連なる標高 1,500m を超える阿寺山地と、西部に広がる東美濃高原に挟まれた南北に長い間地が村の中心であり、白川（通称・加子母川）が流れている。この白川に沿って、加子母を縦断するように国道 257 号線が走っている。

南の付知町・川上村とともに、長野県と境を接して裏木曾と呼ばれている。



図 2-1 岐阜県加子母地域

人口は 2015 年 9 月 1 日現在で 3019 人、987 世帯である。加子母地域内は 10 個の地区に分けられている（図 2-2）。北 5 区を上半郷、南 5 区を下半郷という。

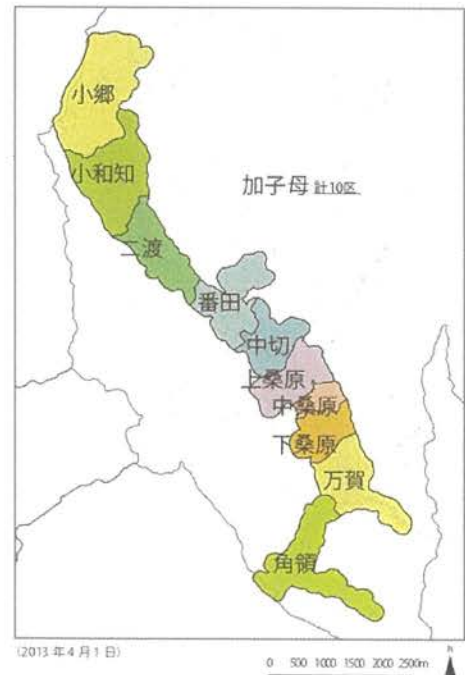


図 2-2 加子母 10 地区

平安時代に加子母の小郷・小和知地区の北側に家や田畑ができ、人が住み始めた。二渡から南方に人が住み始めたのは室町時代以降である。江戸時代は尾張藩の飛び地として管理されていたが、明治 22 年に村制が施行され、岐阜県恵那郡の一部として編入された。また平成 17 年に中津川市と合併し、中津川市加子母地域となった。

享保 11 年（1728）年、加子母の内木家が、尾張藩より山守の役割を任された。山守は、木曾五木（ヒノキ・アスナロ・コウヤマキ・ネズコ・サワラ）の盗伐防止のための見回りや、枯れた樹木の処分を任務としていた。当主は「内木の殿様」と呼ばれ、明治維新に至るまで絶大な権力を持っていた。明治維新後、山林が村有林となり、山守としての役目が失われると、内木家は 17～19 代の 3 代にわたり加子母の屋敷を空けた。現在の当主（20 代目）である内木哲朗は、加子母総合事務所の所長を務めている。

主な産業は、農業、畜産、林業、製材業などである。農業は 7 月から 10 月にかけて収穫される夏秋トマト、飛騨牛の肥育では県内有数の産地でもある。特産品を売る道の駅は地元住民も利用し、地域の情報センターの役割を担っている。地域の面積 114.16 ㎥のうち 94%を山林が占めており、村の東部は国有林である。この地域内で生産される質の良いヒノキを活用した建築業が盛んであり、村内の建築業者が県外へ出張し建築する産直住宅が有名である。また村内の国有林にある神宮備林は伊勢神宮の式年遷宮に使用される木材を供給してきたことで有名である。世界遺産でもある国宝姫路城で 1956 年（昭和 31 年）から 8 年間に渡って行われた解体修理の際にも、この国有林から切り出された心柱が使用された。

2-2 加子母明治座

明治座は加子母の下桑原地区に存在する劇場型の農村舞台である。明治 27 年に創建され、本年で創設 121 年目を迎える。昭和 47 年に岐阜県重要有形民俗文化財に指定された。

毎年 9 月の第一日曜日には「加子母歌舞伎保存会」が主催となって歌舞伎公演が開催される。この歌舞伎は「加子母歌舞伎」と呼ばれ、地域の小学生から高齢者までが役者となり演じる。近年は大道具担当として武蔵野美術大学から学生が手伝いに訪れる。公演当日には加子母外から多くの観光客が訪れる。入場料は取っておらず、花（祝儀）を収入としている。

また、「加子母風起こし実行委員会」主催のクラシックコンサート¹も毎年開催される。東京藝術大学の学生と OB により演奏される。

平成 14 年より、実験的な通年開館がされており、催しが無い日でも内部を見学できる。また、案内役による解説を受けることもできる。

本年（平成 27 年）には、大規模な改修工事が行われた。その影響で歌舞伎公演の日程を 11 月 29 日に、クラシックコンサートの会場を中津川文化会館に変更した。通年開館においては、平成 26 年 12 月～27 年 9 月の期間で閉鎖、10 月より開館を再開した。



写真 2-1 加子母明治座

第2章 註

¹平成10年に東京藝術大学の田中千香士の発案により開催された。以降毎年開催され、演奏は同大学の学生・OBが行う。平成21年の田中氏逝去以降は「田中千香士音楽祭」という主題が付けられている

第 3 章 第一期「創建期」

章の前半は文献調査と聞き取り調査により得られた事実を時間軸に沿いながら事実を順に述べる。後半は聞き取り調査により得られた情報のうち、個人の体験談（エピソード、印象、思い出など）を内容ごとに分類し、記録する。

以下の第4章、第5章も同じ構成とする。

第一期「創建期」（明治 26 年～昭和 18 年）

明治初期に地芝居が栄えた頃、東濃各地には、60 棟以上もの農村舞台が存在した。¹

かつて加子母村には明治座を含め 7 つの農村舞台が存在した。（表 3-1）その規模は、仮設のものから壁や客席のあるものまで様々であった。仮設のものを「拝殿型農村舞台」といい、神社の拝殿に舞台の機能を持たせ、催事がある度に小屋掛けをした。建築物のあるものを「劇場型農村舞台」といい、神社建築とは別で建てられ、客席と屋根・壁が設けられた。

表 3-1 加子母の舞台（年代）

No.	舞台名	所在地	建築年代	廃絶年代
1	宮本座	中切	江戸時代	明治初期
2	神明座	上桑原	江戸時代	明治初期
3	万賀の舞台	万賀	江戸時代	明治9年
4	豊年座	小郷	江戸時代	大正中期
5	明治座	下桑原	明治27年	
6	永楽座	小和知	明治32年	昭和38年
7	大正軒	下桑原	大正3年	大正15年

江戸末期より、加子母村には宮本座、万賀の舞台、神明座、豊年座の 4 つの舞台が存在した。しかし老朽化や火災により、明治初期までに宮本座、万賀の舞台、神明座は廃絶した。舞台が解体された後も、神社の拝殿に小屋掛けをすることで、地芝居や興業芝居を続けた。明治中期に村民の生活が向上すると、芝居が盛んになり、本格的な劇場の必要性が生じた。また明治 24 年の濃尾地震の発生により、安全性を考慮して掛小屋芝居が禁止された。²豊年座は改築し客席を設けた。そして南に明治座（明治 27 年）、北に永楽座（明治 32 年）という劇場型の農村舞台が新たに建設された。さらに大正 3,4 年には大正軒が建設されたが、これは数年のうちに廃業に追い込まれ、大正 15 年に火災により焼失した。豊年座も大正中期に解体された。比較的大規模であった明治座と永楽座は大正期以降も娯楽や会合の場として利用された。

このような農村舞台で上演される芝居は、地域住民が演じる「地芝居」とプロの役者を招く「興業芝居」の 2 つに大別される。

明治座第一期の区分は以下の通りである。

表 3-2 第一期の区分

区分	名称	開始時期	要因
I	明治座創建	明治26年	建設発起
II	用途の多様化	大正元年	大正デモクラシー

I 明治座創建（明治26年～明治末年）

明治座創建の発起から竣工に関しては、『記録簿』に詳細に記録が残されている。（写真1）

記録簿より読み取れた主な作業日程・内容を表3-3にまとめる。



写真1 『記録簿』

表3-3 作業日程・内容

No.	日付	出来事
1	M26.12.1	発起人(田口清助・田口幸六・新田董平)が、下半郷に有志者募集の通知を出す。
2	12.4	有志者7名を集めて明治座建設の第一回会議が行われる。
3	12.6	発起人3名と大工棟梁(梅田兼助)が、神土演劇場(賀茂郡神戸村)の視察に赴く。
4	12.15	万賀の留山にて大木伐採に着手する。
5	12.17	「演劇場新築申合規定」「演劇場建築規定及び其の細則」「演劇場建築役員職務規定」にて詳細な規則を定める。
6	12.18	大木の運搬に取り掛かる。
7	12.26	内木富士松が図面を調整する。
8	12.27	大工らと建築図面の協議が行われる。
9	12.28	部材の価格を算定する。
10	M27.1.2	棟梁(梅田兼助・熊沢保次郎)と二番棟梁(小林清七・持田寿三郎・持田六之助・伊藤莞吉)を選挙にて選出する。
11	3.31	建前に着手する。幕高梁を組み上げる。
12	7.18	田口清助ら世話人6名により、こけら落としの演目の相談会が開かれる。※日清戦争開戦により、後に演目を変更
13	12.??	竣工
14	12.10-12.13	こけら落とし公演。

多くの村民男性が建築に携わる一方で、子どもは石場建ての石を川より運んだ。石には重さにより値段が記されており、それを明治座まで運んでいくと、それに応じた駄賃がもらえた。子どもはその中から自分の力に見合った石を選び、負い縄（イナワと呼ばれた）を用いて石を背負い、所定の位置まで運んだ。製糸業により現金収入のあった女性は、寄付を集めて舞台の引幕を発注した。幕には寄付者屋号と姓名が染められた。この引幕は「娘引幕」と呼ばれ、現在も使用されている。（写真2）

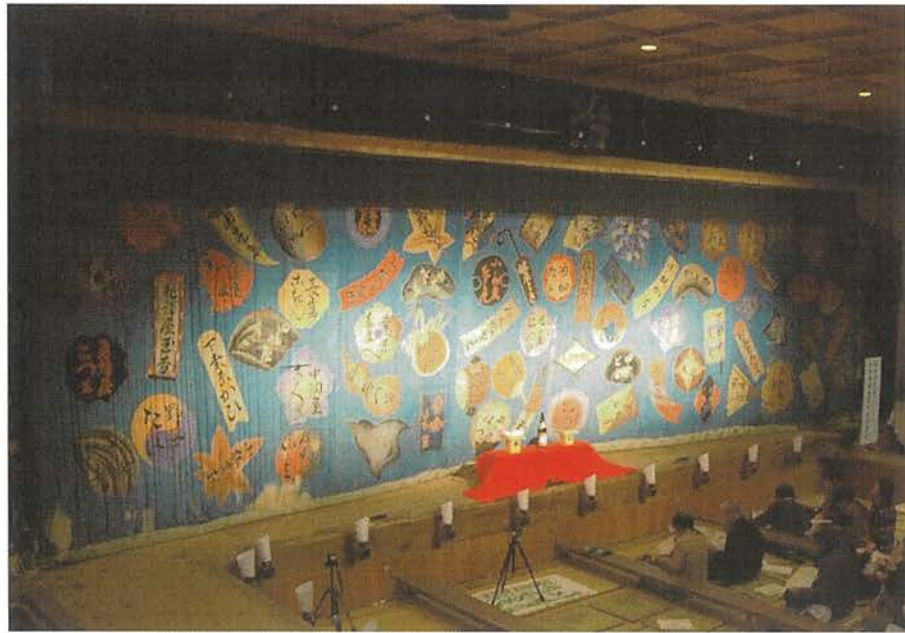


写真2「娘引幕」

建築予算は下半郷の住民からの寄付金によって賄われた。その他の寄付された資材・人材を当時の現金価値に換算すると、予算は総額 903 円 85 銭に及んだ。³寄付者は総勢約 2200 人、大工や木挽等の労働者は総勢約 950 人と総力を挙げての大工事であった。こうして建設された明治座は、明治 27 年 11 月に竣工した。発起からわずか 1 年ほどのことであった。

翌28年1月21日、田口清助（発起人・建築取締）と建築委員4名により、『明治座管理規定』が制定された。管理規定によると明治座は、下半郷で選出された6名の世話係により選ばれた2名の支配人（総責任者）のもとに運営されることが定められている。このとき選出された内木富士松と安江忠七は、以降大正3年まで支配人を務めた。

管理規定第八条には用途別の使用料が記載された。当初想定された使用例は以下のものがある。（写真3）

- ① 場代付芝居興行：個人的な興行主が明治座を借りて興行するもの
- ② 木戸芝居興行：下半郷5区が共同で行う興業芝居のこと。主に歌舞伎であった。
- ③ 芝居以外の各種演芸
 - ・ 浄瑠璃：義太夫節。三味線を伴奏に演者一人が歌うように口演する。
 - ・ 浮れ節：浪花節・浪曲。三味線を伴奏に演者が節（歌）と啖呵（語り）を演じる。
 - ・ 手品
 - ・ 見せ物
 - ・ 幻灯：ガラス板に描いた絵をロウソクや石油ランプの光で白い幕に投影し、紙芝居のように演じる。
- ④ 非営利目的の会合・地芝居：役場主体の式典、青年団による集会など

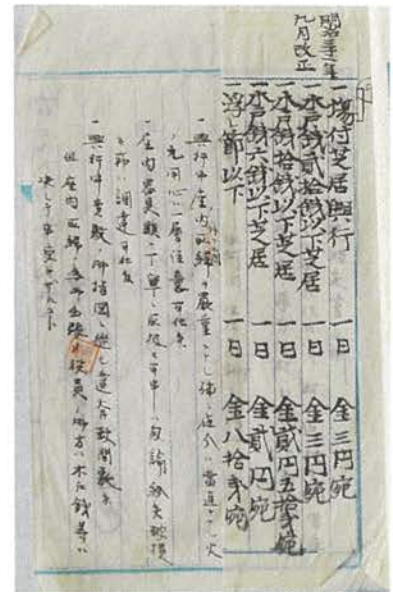


写真3 『明治座管理規定』第八条

中でも地芝居は盛んであり、明治座において地芝居の利用料は無料と定められた。加子母村で地芝居が栄え始めた当初は、振付の師匠を尾張方面から招いていたが、後に村内にも優れた振付指導者（師匠）が育ち、明治末期・大正・昭和初期にかけて活躍した。

こけら落とし公演は、犬山の一座を招いた興業芝居であった。当時は日清戦争の最中であったため、「日清戦争実地芝居」と称して開催された。加子母村からも多くの出征兵士が送り出されていたことを考慮しこの公演の目的を、出征兵士の家族の慰問と忠君愛國心を発揚させることであると定め、村長と警察署長にそれぞれ「願書」「興行届」という許可申請の書類が送られた。(写真4,5)



写真4「願書」



写真5「興行届」

I 聞き取り記録

聞き取りをした内容を「管理・運営・組織」「娯楽・催事」「青年団活動」「その他」に分類する。また、表記の仕方は以下の通りである。(敬称略)

■話題項目

人物 (生まれ年)

証言内容

(1) 管理・運営・組織

■建設秘話 (大木の運搬)

田口森雄 (S9 生) :

祖母のきょう (M9 生) によれば、伐採して人力で山から下ろすのに工夫したようだ。毎日 100 人程の人が、木遣り音頭に合わせて引いたが、わずか 2 寸 (7cm) くらいしか動かなかった。急勾配で危ないから牛を使うこともできなかった。とびを持った人が何人かついていて木を浮かしたり、木の皮をむいて少しでも軽くしたりするような工夫がされた。

熊澤和之 (S14 生) :

明治座の梁材は、長さ 14.5m、太さ 70cm のモミの大木である。留山 (一般の立入を禁じられた山林) から南北街道まで引き下ろしてきて、そこから回転させるのにも苦労があった。明治座までの 500m~1km を、100 人以上で木遣り音頭で引いたようだ。

■建設秘話 (大木の設置)

田口森雄 (S9 生) :

あれだけの材木をどうやって梁位置まで上げたか不思議だが、柱と梁を組んだものを引き起こすか、枕木を使うかしたのではないか。

熊澤和之（S14生）：

大木の両端に枕木を井桁に組んで持ち上げた。一週間かかったと親父から聞いた。

■建設秘話（石の運搬）

熊澤和之（S14生）：

アトラ⁴の裏が湾処になっていて、そこから採取した石が石場建てとして使用されている。林鍵一郎さん（M8生）によると、石場建ての石を一本の負い縄（イナワと呼んだ）で背負ったらしい。それに1銭10銭50銭などと書いてあって、重いほど駄賃が高かった。それを自分の体力に合わせて選んで、小さい子は小さい石を背負わせてもらって明治座まで運んできた。

(2) その他

■万賀の舞台

熊澤和之 (S14 生) :

万賀の舞台は下半郷にあったことから、明治座の前身といえる。明治座の近くにある下郷神社 (かつては熊野神社) と、中桑原のお宮と万賀の天王神社を合祀して芝居をやっていた。その頃は歌舞伎が許されていなかったから、お神楽を奉納するといって実は歌舞伎をやったようだ。

■明治座になぜヒノキが使われていないか

熊澤和之 (S14 生) :

加子母はヒノキの産地にも関わらず、明治座には柱として1本しか使用されていない。それは大前小前の争い⁵の後でヒノキが少なかったからである。また、江戸時代からの禁制により、当時地元の人たちがヒノキを使うことに抵抗があったからという話もある。⁶

II 用途の多様化（大正元年～昭和18年）

第一次世界大戦後の好景気とそれに続く不景気の中で、日本各地で大正デモクラシーの機運が高まると、明治座では政談演説や青年団（戦後の青年団とは活動内容や年齢制限が異なる）による弁論大会が行われるようになった。また、公共団体や会社などの慰安・宣伝の会合等にも利用された。

大正10年に東京で「興行場及興行取締規則」が制定されたのと同時期に、地方でも娯楽物に対する警察の取締が強化されたが、加子母村も例外ではなかった。興行法（正式名称・制定年不明）により素人が芝居をする際にも鑑札の交付が必要とされた。⁷ 役者に芸名をつけ鑑札を受ける煩わしさから、地芝居の公演は回数を減らした。昭和7年の祭礼狂言以降、昭和48年まで明治座で地芝居が行われた記録がない。⁸

地芝居の代わりに新たな娯楽として人を集めたのは映画であった。当時は「活動写真」と称して上映された。無声の映像に合わせて活動弁士が台詞の読み上げや内容説明を行い、音楽隊5人ほどが、ヴァイオリンやトランペットで演奏をした。楽士は昼間に楽隊をしながら村を練り歩き、映画の宣伝をした。また、剣舞や、連鎖劇（舞台上の芝居と活動写真を組み合わせて物語を進める）など、歌舞伎以外の興業芝居も上演された。

大正3年より、2代目支配人として梅田強一が選ばれた。彼は昭和21年まで支配人を務める。

大正9年には維持管理をしやすいするために、屋根が板葺きから瓦葺きに葺き替えられた。（以降平成26年まで瓦葺き屋根である）

このころ行われた芸能は『金銭出納簿』『会計』⁹によって大方知られる。歌舞伎（ほとんど買芝居）、浪曲、漫才、奇術、歌謡ショウ、剣劇などの各種大衆演劇であった。

II 聞き取り記録

(1) 娯楽・催事

■興行物（区分II）

田口森雄（S9生）：

興業主に頼まれて自転車に乗ってふれ太鼓をたたいた。

(2) 青年団活動

■ 青年団活動（区分Ⅱ）

和田富郎（T15/S1 生）：

尋常高等小学校を卒業してから（15 歳）、徴兵検査を受け兵隊に行くまで（20 歳）の活動だった。1/7 に明治座に見に行くのが楽しみだった。弁論大会、剣舞、演劇（喜劇、社会劇ともう 1 種類）をやっていた。大東亜戦争が始まってから（S16）は、人がいなくなったからできなくなった。

田口敬助（S2 生）：

弁論が主で、剣舞とか演劇もあった。僕は音楽をやっていて、3 つ上の先輩と「天王ブラスバンド」を組んでいた。戦争が始まってからは兵隊送りの音楽隊として活動していた。

安江智夫（S10 生）：

戦前の明治座での青年団は弁論大会が主だった。詩吟や剣舞、その合間に弁論していた。

(3) その他

■明治座の飲み屋

和田富郎 (T15/S1 生) :

小学校にあがる前 (S6 頃)、明治座に飲み屋があり、芝居が来た時だけ開いていた。囲炉裏でおでんなどを煮て、コップ酒を出していた。子どもはついて行っておでんを 1 串買ってもらうのが楽しみだった。明治座すぐ右側 (現在のトイレの辺り) にコップ酒の小屋があった。支那事変が始まった頃 (S12)、なくなった。

■明治座の避雷針

和田富郎 (T15/S1 生) :

昭和の始め頃、明治座の棟に避雷針が 2 本立っていた。朝日できらきら光っていたのが印象的だった。昭和 10 年頃、旅役者か誰かが屋根に上がって盗んでいったと聞いた。

第3章 註

-
- 1 景山正隆「沿革と芸能」(1974)『加子母の農村舞台-明治座の建築と沿革-』(加子母教育委員会, 1993) 14. 以下この文献を「沿革と芸能」とする
 - 2 加子母村誌編纂委員会編『加子母村誌』(岐阜県恵那郡加子母村, 1972) 601.
 - 3 加子母村誌編纂委員会編『加子母村誌』(岐阜県恵那郡加子母村, 1972) 602.
 - 4 加子母に存在するスーパーマーケット
 - 5 明治10年~13年に、村有林の木曾五木(主にヒノキ)の収益金の分配方法をめぐり、28人の大前(土地を持っている人)と87人の小前(小作人)が裁判を起こして争った。最終的に和解をするが、巨額の裁判費用を木曾五木により返済したため、加子母の山林にヒノキがなくなった。
 - 6 江戸時代、尾張藩により、ヒノキの伐採や山林への立ち入りが厳しく規制されており、「ヒノキ一本首一つ」とも言われた。
 - 7 加子母村誌編纂委員会編『加子母村誌』(岐阜県恵那郡加子母村, 1972) 597.
 - 8 「沿革と芸能」23.
 - 9 「沿革と芸能」14.にて明治座の関係資料としてあげられている。

第 4 章 第二期「停滞期」

第二期「停滞期」（昭和19年～昭和44年）

戦争の激化により、東濃地方に存在した劇場形式の農村舞台は軍事倉庫や工場として利用された。加子母村においても、各地の大規模な建物が軍需品の倉庫となった。明治座と小和知の永楽座は、いずれも戦後は建物の荒廃が見られたものの、村民によって修復がなされた。その後若者の活動の場として栄えるが、高度経済成長の到来とともに次第に衰退していく。

明治座第二期の区分は以下の通りである。

表 4-1 第一期の区分

区分	名称	開始時期	要因
Ⅲ	戦中	昭和19年	軍事倉庫
Ⅳ	戦後復興	昭和20年	軍隊からの開放
Ⅴ	農村舞台の衰退	昭和29年	高度経済成長

Ⅲ 戦中（昭和 19 年～昭和 20 年）

昭和 12 年に日中戦争が開始された頃より、加子母村からも成人男性が出征兵士として送り出され始めた。明治座での催事は、青年団員や観客の減少により次第に回数を減らした。

昭和 19 年、本土空撃の激化に伴い一切の娯楽は中止され、明治座は軍需品の倉庫として利用されることとなった。客席の枡席を取り壊し、バケツや毛布等の生活用品が敷き詰められた。兵隊数名が入り口で番をし、村民の立ち入りは禁じられた。

管理者は依然として梅田強一であった。

Ⅲ 聞き取り記録

(1) 管理・運営・組織

■管理者（区分Ⅲ）

梅田周作（S12 生）：

父は戦争に行ったが、祖父の梅田強一（M13）は明治座の管理人をしていた。戦後に明治座保護会ができるまで管理人であった。

(2) 青年団活動

■ 青年団活動（区分Ⅲ）

田口敬助（S2生）：

青年団のうち十代の人らで「天王ブラスバンド」を組んで、水無神社で兵隊送りをした。

(3) その他

■兵隊との交流

梅田周作 (S12 生) :

前に立っている兵隊にキュウリの塩もみを届けた。

吉村美枝 (S13 生) :

若い兵隊さんが3人ほど来て鉄砲を持って立っていた。トウモロコシやサツマイモを「おやつの代わりに食べんさい」と持って行って、兵隊さんの話を聞いた。私はお守りしてもらった。明治座の中に入れてもらったこともあるけど、奥までぎっしり物が詰まっていたよ。

IV 戦後復興（昭和20年～昭和28年）

昭和20年8月に終戦を迎えると、年内のうちに兵隊は退散し明治座は開放された。軍需品が取り除かれた明治座は、客席が傷み屋根は雨漏りがするほどの惨状であった。昭和21年¹に安江巳郎、河村まさたか（漢字不明）、熊沢周二らが中心となり「明治座保護会」を結成した。これを機に、支配権が2代目支配人の梅田強一から保護会に移行した。保護会は昭和22年に創建当初の管理規定を制定し直し、建物修復工事を計画した。工事は寄付金により実施されることとなり、下半郷5区で1名ずつ選出された役員により徴収された。工費は29万円であった。²

回り舞台などを修理し劇場として機能するようになると、保護会は松竹歌舞伎から沢村訥子・中村芝鶴一行（昭和23年）、守田勘弥・沢村訥子一行（昭和26年）を呼び歌舞伎公演を行った（写真4-1）。また、映写室を後方に設け（昭和23年一階に設置、25年二階に移動）、映画の上映会を行った。また、小中学生の演芸大会に明治座が利用された。

また、この時期は青年団活動が活発化し、「青年大会」が毎年1月7日に開催された。



写真 4-1 昭和26年の大歌舞伎の記録

IV 聞き取り記録

(1) 管理・運営・組織

■兵隊の退散

和田富郎 (T15/S1 生) :

昭和 20 年に兵役から帰ってきた頃はまだ兵隊がいた。木の棒をもって 2 人ずつ交代で立っていた。人の話では油、革製品があったらしい。昭和 20 年秋過ぎに解放された。9 月くらいまで兵隊がいた。11 月末か 12 月初めころトラックで持って行った。明治座は荒れ放題だった。

吉村美枝 (S13 生) :

3, 4 台のトラックが来てその荷物を持って行ったときに、トラックにひっかけられて下郷神社の鳥居が崩れたのを覚えている。

■終戦間際の明治座

吉村美枝 (S13 生) :

終戦になって兵隊が帰った後に、義理の兄 (安江巳郎) が明治座の夜の番を頼まれて、兄弟 9 人みんなで映写室に泊まりにいった。屋根も破れてお月様が見えた。どこそこの誰かさんがバケツを盗んでいったとか聞いた。他には、カーペット、ドラム缶のようなもの、こうもり傘の骨を束ねたものがあった。村のものではないから責任を持つ人がいなかった。でも (軍事物資を) 入れさせた手前、番人を置かないといけないということで番をするようになった。

安江利朗 (S13 生) :

物資の重みで客席がすごく傷んで、それで昭和 21 年に直したらしい。舞台から裏の方は物資を入れなかったのが傷まなかったが、客席のところは山のように積んだらしい。軍隊の物資は、食料など生活物資で、21 年に直した時には、多少残っているものがあったらしい。

■管理者（区分Ⅳ）

梅田周作（S12生）：

戦争から若い人たちが帰ってきて明治座をどうしようかとなり、祖父（梅田強一）は身を引いた。保護会にも参加しなかった。

(2) 娯楽・催事

■興行物（区分Ⅳ）

梅田周作（S12 生）：

10 歳くらい（S22）の頃で、旅回りの芸人で印象に残っているのはへび使い。へびを首にまいていた。「見に来てください」と、ちんどん屋が来てその後を衣装を着た人たちが歩いて回る。死んだ蛇を新聞紙でくるんでその上にバラの花を置いていた風景を思い出す。

吉村美枝（S13 生）：

終戦になると旅芸人が来て明治座を使った。タバコ屋のウィンドウやお店の入り口にチラシが貼ってある。当日夕方になると明治座近所の子どもが太鼓を叩いて宣伝をする。そうするとビラ 1 枚につき入場券がもらえる。私はやらせてもらえなかったけど、父（古田甲子郎、「新日本紀行」にて回り舞台を回した人）が明治座保護会に入っていて、入り口で木戸銭取りをしていたから、そこから潜り込んで無銭で見た。

安江利朗（S13 生）：

S23 に結構な歌舞伎が来た。大都市は空襲で劇場が焼けちゃって、かなり有名な歌舞伎役者はすごく地方に来た。明治座にも記録が残っている。

■至誠団

田口森雄（S9 生）：

中桑原・下桑原・万賀の 3 区の 16～27 歳の若者で構成された団体。5/5 の下郷神社の祭りの際に、明治座で芝居をした。S24 に父親が亡くなり、その年に和田富郎さんと芝居に出た。子別れの場面があり、涙を誘った。

■映画

田口森雄（S9生）：

映画は毎週か、月3回くらい上映した。柳家金語楼、花菱アチャコ、「君の名は」、岸恵子があった。昭和26、27年頃は最高によかったと思う。

安江智夫（S10生）：

「今日は映画があるぞー」という太鼓に子どもはついて回った。

梅田周作（S12生）：

映画をやるときには拡声器から音楽が流れた。橋幸夫の「潮来笠」だったか。谷崎潤一郎と京マチ子の「鍵」、石原裕次郎、美空ひばり、岸恵子「君の名は」等、東京での上映から半年～1年たってからこっちに来た。人が入るときは1階も2階もいっぱい。昭和30年後半、40年頃は盛んだった。男女の会う機会がないのでデートの場所だった。

吉村美枝（S13生）：

フィルムが切れてカタカタいって何も映らなくなると、その都度技師さんがフィルムを張り合わせた。Gメンものやヤクザとお巡りさんが戦うシーンはみんな手を叩いて見た。もうすぐ「終」の文字が出るなどになると、順々に立って預けた下駄を下足番のおばちゃんに取ってもらった。早く行かないとなかなかもらえないから命がけで飛んで行ったよ。

安江利朗（S13生）：

中学を卒業した辺り（S29）、映画をやる時分にはお手伝いに行った。切符切ったり、掃除したりした。

中島敏明（S23生）：

明治座や永楽座に映画を見に行った。赤木圭一郎、小林旭、石原裕次郎、北原みえ、吉永小百合、宍戸錠、浜田光男などが出た。日活が一番忙しい時期だった。明治座の後ろの囲ったところに映写機が置いて

あった。

今井ゆみこ (S23 生) :

小学生のとき (S30~35)、映画を月 2 回くらいやっていた。学校で「映画は月に 1 回」と決められていた。石原裕次郎、水原ひろし、赤木圭一郎など、日活映画の全盛期だった。明治座の外の大きなスピーカーから、三波春夫の「チャンチキおけき」が流れて、「今日の出演は宍戸錠」とアナウンスされた。その音を聞いて今日映画なんだな、と見に行った。私は父が保護会をやっていたからその家族ということで、お金払ってみたことはなかった。

粥川孝美 (S30 生) :

子どもの頃、ザ・ピーナッツの「モスラ」を見た。

■ 演芸大会

吉村美枝 (S13 生) :

小学校から中学校の頃の学芸会は明治座や永楽座でやった。小 2 (S21) のとき「十五夜お月さん」を踊った。木琴を叩いたこともある。中学校では歌劇をやった。私はやらなかったけど、弁論もあった。

熊澤和之 (S14 生) :

戦後小・中学生 (S21~S29) のとき、明治座と永楽座で演芸大会をした。小 1 から中 1 の間に 2 回やらないといけなかった。親や祖父母が来るから明治座に入りきらなかったな。

(3) 青年団活動

■青年団（区分Ⅳ）

安江智夫（S10 生）他：

中学校卒業後 15～25 歳の男女が任意で加入する加子母村の団体。住む地区により、第 1 分団（小郷・小和知）、第 2 分団（二渡・番田。中切・上桑原）、第 3 分団（中桑原・下桑原・万賀・角領）の 3 つの分団に分かれて所属した。上層組織として、26～28 歳程の者からなる青年団本部なるものがあり、3 分団をとりまとめた。

■青年大会（区分Ⅳ）

安江智夫（S10 生）他：

この時期の青年団の活動のひとつ。各分団は弁論隊・演劇隊・音楽隊に分かれ、青年大会に向けて練習を重ねた。毎年 1 月 4, 5, 7 日に各分団の団舎にて発表が行われた。第 1 分団は永楽座、第 2 分団水無神社の公民館、第 3 分団は 1 月 7 日に明治座にて開催された。大会には多くの村民が観客として訪れた。

■青年大会（区分Ⅳ・弁論）

和田富郎（T15/S 生）：

弁論大会は他分団から派遣弁士が来るなどの交流があったが、演劇や音楽は交流はなかった。

田口森雄（S9 生）：

村長に原稿を作ってもらって弁論大会に出た。

安江智夫（S10 生）：

弁論大会では、お客がやじった。ほとんどの人が暗記していて論紙を見ていなかったが、言葉に詰まると「朗読許す！」って叫ぶ。おもしろ

ろかった。僕は最初3年で弁論をやった。最初は論紙を書いてもらい、それを暗記していた。明治座に泊まり込みで練習をしたこともある。水道がないから用水で米を洗って、明治座の玄関入ったとこの土間で半郷炊飯した。みんなで布団やコタツを持ってきた。

吉村美枝 (S13 生) :

4年生の頃 (S23) のこと。姉が師範学校時分の岐阜市の終戦当時のことを、治安が良くない、と発表したら、「おまえが婦人警官になればよかったのに」とヤジが飛んだ。青年団に入ったばかりの人が付知から油揚げやお菓子を加子母に売りに来ていて、それを論文書いて読み上げたら、「峠を越えたときに狐に騙されて油揚げをとられへんかったか」とやじられて、発表している人が次が言えなくなったりした。ほんとに楽しかった。

熊澤和之 (S14 生) :

子どもの頃見に行ったが、結構ヤジが飛んでその中でやるのでなかなか大変だった。第1分団や第2分団や東白川から来た派遣弁士と一緒にやった。まじめにやっていたがヤジが自由だったのでそれを専門に上手に飛ばす人がいた。

■ 青年大会 (区分IV・演劇)

和田富郎 (T15/S) :

23歳、22歳の時おばあさん役をやった。戦後は昔の弁論大会から青年大会に名前を変えて、弁論、演劇、音楽をした。剣舞はなくなった。青年団卒業後 (S26) からは清三さんの後を継いで青年団演劇の脚本を書いていた。脚本で身を立てたくて、旅一座が来た時に入れてくださいと言ったことがある。

清三さんの脚本としては「からしおしぐれ」「やぶれがさ忠臣蔵」わたしの脚本としては「帰った制服」「牧場のコーラス」があった。

吉村美枝 (S13 生) :

青年団のOBが演劇の脚本を書いた。各分団で2人くらいずつ選ばれて、演劇の採点に行った。優秀な演劇は東濃大会、県大会、全国大会に行った。

■青年大会 (区分IV・音楽)

和田富郎 (T15/S1 生) :

New Sky King Band が活躍したが、音楽が盛んだったのは3分団の特徴。

田口敬助 (S2 生) :

戦後、「New Sky King Band」という音楽バンドを立ち上げた。名前は戦中の天王ブラスバンドからとった。略してNSKB。最初はトランペット、アコーディオン、ギター2人、ドラム、クラリネット、バリトン、司会の8人構成だったと思う。30歳のとき(S32)、高蔵寺の近藤製糸工場に演奏をしにいった。

安江智夫 (S10 生) :

天王ブラスバンドが、S20, 21 辺りに改名した。僕は立ち上げ人ではないが、後から入った。楽器を買うのに労働会に行って、山に入って下狩りをしたり、セメントを背負って山に登ったりして稼いだほか、青年団からお金を出してもらった。演奏するのはほとんど演歌だったが、楽譜がこの付近にはないから、岐阜市まで買いにいった。

(4) その他

■下足 (写真 4-2)

吉村美枝 (S13 生) :

(外から明治座に向かって) 右側の、今事務所のところに下足があった。

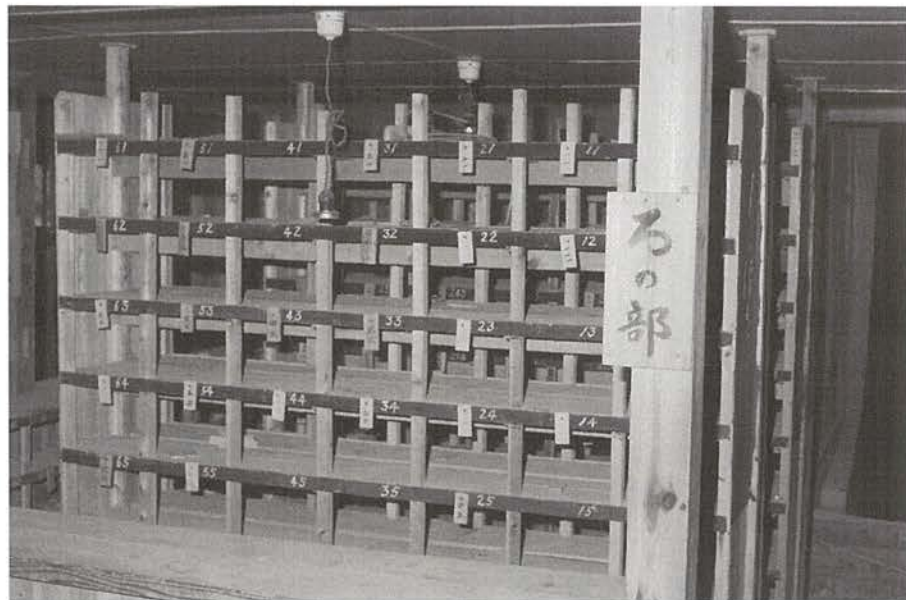


写真 4-2 下足 (写真提供: 梅田周作)

■お菓子屋さん

吉村美枝 (S13 生) :

入って左側のところ、階段の下で店を開いていたね。飴やまんじゅうを持ってきていた。映画なんかで盛んに開いた時分から今井屋が店を出していた。

今井初雄 (S23 生) :

祖父 (仁太郎) がお菓子屋を始めたのは、100 何年前くらいかな。明治座で催し物があるときに、正面玄関入って左の階段の下で、父 (悦造) が仁太饅頭、菓子類、りんごを売った。

V 農村舞台の衰退（昭和 29 年～昭和 44 年）

昭和 30 年代前後は映画と青年大会の隆盛期であった。映画は月に 2, 3 度の頻度で上映され、青年団やその他村の公共団体の資金づくりを助けた。保護会の会計も黒字となり、昭和 34 年に事務室の増築を行った。

しかし、昭和 30 年代後半にテレビが一般家庭へ普及したため、娯楽の対象が芝居からテレビに移行し、歌舞伎公演（興業芝居）は昭和 38 年頃に廃止された。さらに小・中学校に講堂が建てられたことにより、貸施設としての需要が低下したため、明治座の収入は激減した。昭和 42 年 12 月 30 日の青年団の利用を最後に、「会計」に収入の記録はなくなっている。³

歌舞伎公演の廃止と同じ時分に、明治座を明治村に寄贈する案が練られた。保護会は、明治村の管理者である名鉄の関係者に交渉したが、明治村には当時既に呉服座（明治 25 年建設）があり、受け入れは拒否された。娯楽の衰退により維持管理のための資金がなく、取り壊しの話すら出た。しかし、安江巳郎が資金の工面を申し出たことにより、以降昭和 46 年までの約 10 年間は個人資金により管理され、実質支配権は保護会から安江巳郎に移行した。⁴

上半郷の永楽座も同様に廃館の危機に追い込まれ、昭和 38 年に解体された。

V 聞き取り記録

(1) 管理・運営・組織

■明治座の衰退

安江利朗 (S13 生) :

安江巳郎さんが資金出しをまかされる前の維持費は、地域からお金を集めていた。若い人や関心のない人の中には、「金なんかとらずに壊しちゃえ」という人もいた。

熊沢和美 (S23 生) :

小学生くらいまでは映画に行ったが、中学生頃 (S36～) はテレビが入って来たから行かなかった。

佐藤正 (S28) :

中学校の時 (S41～S43)、便所ガラスを割って怒られた。割ってもいいやと思えるくらい廃屋の状態だった。

粥川孝美 (S30 生) :

4 歳～10 歳のころ (S34～40)、明治座の二階ではねて遊んだ。何かに使われている雰囲気ではなかった。祖父 (古田甲子郎、「新日本紀行」にて回り舞台を回した人) が鍵を預かっていた。(母の姉の嫁ぎ先が安江巳郎)

(2) 青年団活動

■青年団活動（区分V）

梅田周作（S12生）：

夜になると高校卒業した男女が近所の家に集まってトランプしたり話をしたりクリスマスをしたりした。オクラホマミキサーなどのフォークダンスが流行した。

吉村美枝（S13生）：

9月の水無神社のお祭りの日に3分団に分かれて小学校のグラウンドで運動会をした。恵那まで体育祭に行ったりもした。

熊澤和之（S14生）：

安いものを売るとか、奉仕活動もした。

熊沢和美（S23生）：

僕らバンド活動するやつはあまり入らなかったが、役所の教育委員会が主催し、補助金をもらって演劇やサークル活動をしていた。

粥川孝美（S30生）：

名前だけ入れたけど、15歳～21歳（S46～52）は加子母の外に出ていたから、私は特に活動はしなかった。

■青年大会（区分V）

梅田周作（S12生）：

昭和1桁の人たちは青年大会（弁論大会や芝居や踊りや音楽）を盛んにやっていた。それを見に行くのが楽しみだった。昭和40年頃になると見に来る人も少なくなって衰退していった。私たちは衰退していった時代だった。

今井ゆみこ（S23 生）：

20歳の頃（S43）は、まだ青年団が弁論大会や演劇大会を明治座でやっていた。

(3) その他

■永楽座解体その後

熊澤和之 (S14 生) :

舞台装置の唐紙が明治座にきている。上半郷の役者の人に明治座で使ってほしいと言われた。大きさが合わず立てようとしてもぱたんと倒れて立たないから、下に板を打ってあげてたてた。

中島敏明 (S23 生) :

同じ回り舞台だったから、永楽座の道具が明治座に来たということはある。

■浦島太郎の引幕

今井ゆみこ (S23 生) :

子どものとき、「娘引幕」のほかに浦島太郎の緞帳があった。浦島太郎の指が6本あったはず。白っぽくて、浦島太郎が亀に乗って釣り竿担いでいる。あれはどこに行っちゃったんだろうと、明治座に行くといつも思う。

第4章 註

-
- 1 加子母村誌編纂委員会編『加子母村誌』（岐阜県恵那郡加子母村，1972）608.
 - 2 「沿革と芸能」18.
 - 3 「沿革と芸能」18.
 - 4 熊澤和之の証言。

第 5 章 第三期「再興期」

第5章 第三期「再興期」（昭和45年～現在）

昭和32年に村国座（岐阜県各務原市, 明治10年創建）が岐阜県の指定を受けたころから、農村舞台が民俗資料として注目されるようになった。昭和43年に文化庁が設置されると、文化庁文化財保護部記念物課は、国指定文化財の増加をはかった。昭和45年から48年にわたり、全国に残る1000棟以上の舞台の中から指定候補として選定した31棟の舞台の精査が実施された。

その後東濃地方各地で歌舞伎保存会が発足し、改修・修復をした上で、休止していた歌舞伎公演を復活させる動きが見られた。（表5-1）

明治座第三期の区分は以下の通りである。

表5-1 第三期の区分

区分	名称	開始時期	要因
VI	明治座再興	昭和45年	文化財候補
VII	明治座の持続的利用	平成7年	Iターン促進事業

VI 明治座再興（昭和 45 年～平成 6 年）

明治座は平成 45 年に国指定文化財候補として精査対象となった。文化庁の審議会より専門家が複数名で明治座を訪れたが、国指定を受けるためには、昭和の初め（年月不明）に張られた天井を剥がす必要があり、そんなことはできないと支配人側が国指定を拒否したという。

昭和 47 年 7 月 12 日に岐阜県重要有形民俗文化財に指定されると、明治座の再興を目指して、「郷土芸能を楽しむ会実行委員会」が発足し、平成 3 年まで毎年 5 月 4 日に「郷土芸能を楽しむ会」が開催された。

昭和 48 年には「加子母村歌舞伎愛好会」が安江清三らにより発足され、地元住民による歌舞伎の公演を開催するようになった。地芝居が加子母村で行われるのは十数年ぶり、明治座で行われるのは昭和 7 年以来のことであった。

（翌年 49 年には「加子母村歌舞伎保存会」に改称、さらに昭和 60 年には「加子母歌舞伎保存会」に改称し、現在に至る）

文化財に指定されたことにより電気・水道料と固定資産税が公に免除できるようになった。

同年に地域住民により瓦屋根の葺き替えが行われた。（写真5-1）



写真 5-1 瓦屋根の葺き替え作業風景

（写真提供：梅田周作）

歌舞伎愛好会は、松本団升¹を振付師として招き、瑞浪市に存在した安藤家という衣装屋から衣装を借りた。この歌舞伎公演は昭和49年と平成20年に、NHK新日本紀行の取材を受けた。

こうして明治座は再び活気を取り戻した。歌舞伎や郷土芸能を楽しむ会で納められた祝儀により、コンサート等の利用料などで、資金の面でゆとりが出てくると、明治座保護会は明治座の改修工事を度々計画した。（表5-2）

表 5-2 昭和 47 以降（平成 27 年以前）の改修工事

実施月日	内容	費用(円)
S48.9	屋根替え	1321万
S53.10	電気関係改修	2132万
S55	楽屋	
S56	唐紙	
S57.3	床板・はやし場の補修	3700千
S58.9	避雷針設置	2456千
H5.9	便所改修	16274千
H8.3	鎧壁・調光室・入り口引き戸	14450千
H9.3	付属棟建設	34505千
	舗装等の周辺整備	9785千

昭和57年、「内木家」の20代目の当主の内木哲朗が3代にわたる不在の後、加子母に定住した。氏は、平成3年、土木部にて嫌谷周辺の整備をした際に、明治座に関わった。(写真5-2)平成8年には企画部に配属され、Iターン者とともに明治座での催しを企画した。



写真 5-2 整備事業の際に立てられた看板

VI 聞き取り記録

(1) 管理・運営・組織

■文化庁の専門家を帰らせた話

安江利朗 (S13 生) :

有名な話です。管理していた人は安江巳郎さんっていう軍隊上がりの人で。「天井を剥げとはけしからん。あれは昔の人が苦勞してつけたものだ」と追り返した。国の文化財になると規制が厳しいと聞いて、県の文化財でも十分だと僕は思う。

■屋根替え (S48)

安江智夫 (S10 生) :

はしごを上って、瓦2枚1セットにしてリレーのようにして屋根にあげた。

(2) 娯楽・催事

■ 郷土芸能を楽しむ会

安江智夫 (S10生) :

昭和47年～平成3年に毎年1回明治座で開催された行事。毎年5月4日、下郷神社の祭りの前夜祭として夕方5時半から行われた。入場無料で、参加者の寄付によって成立していた。中桑原区・下桑原区(2区合同)と万賀区が隔年で主催した。演目は「歌舞伎以外の娯楽」であり、子供みこし、獅子舞に始まり、NSKBによる歌謡ショーで最後を締めくくることが恒例であった。(巻末資料)

今井ゆみこ (S23生) :

婦人会がコーラスをやった。下区に嫁に行くときには白いブラウス黒いスカートをもっていかないといけない、というような話もあった。歌以外に何かないかといったときに、うちの子が一輪車やりたいと言うからやらせたことがあった。

■ 歌舞伎復活・役所視点

熊澤和之 (S14生) :

「歌舞伎をやることになったから君が面倒もみろ」という村長命令を受けて、主に資金面の仕事を引き受けた。当時はまだ歌舞伎保存会に予算が下りなかったから、老人クラブの慰安行事として申請を出して、老人クラブを歌舞伎公演に招待した。村の頃(～H16)、歌舞伎公演は2日間あり、初日は老人クラブの日、2日目が一般公開の日だった。

■ 歌舞伎復活・関係者視点

安江利朗 (S13生) :

歌舞伎が復活することになったとき、僕は大工だったので、父(安江清三)から「あれ作れこれ作れ」と言われてやるうちに大道具係にな

った。10年したら棟梁と呼ばれるようになり、それからH24までは歌舞伎の時に指示出しをした。団女さんみたいな振付の先生は、一年中予定が入っている。岐阜のこの地域一帯で地芝居があるから、かち合わないように、どこは何月と決まっている。加子母は9月の第一日曜日。

■歌舞伎の花（祝儀）（写真 5-3）

安江利朗（S13生）：

歌舞伎は無料だが、花っていうご祝儀を持ってくる。村の役職やっている人などはのし袋に入れて持ってくる。おひねりも飛ぶ。

熊沢和美（S23生）：

S48に始まった当初は、地元の人が多かった。昭和と平成の変わり目辺りでマンネリ化してくると、役者の関係者・家族、役員の人しか来なくなった。一般の人（役者等で関わってない人）は入りづらいというか、無料だったが、寸志制度のせいで行きづらくなったのだろう。



写真 5-3

寸志を納めた人物や団体の名が書かれ、歌舞伎公演の際に飾られる

■加子母住民の明治座離れ（区分VI）

佐藤正（S28 生）：

昭和 53 年頃からは、カモネギも青年団も使わなくなって、年に一度の歌舞伎だけになった。

粥川孝美（S30 生）：

代々「役者の家」があり、あの家の踊りこの家の踊りという派閥があった。一般人はなかなか敷居が高くて参加しづらくなったのだと思う。

(3) 青年団活動

■若者の音楽活動 (S20 代生)

今井初雄 (S23 生) :

安江智夫さん (S10 生) と一緒に New Sky King Band をやっていた。NSKB 自体はもともと青年団活動だったらしいが、このときは違った。当初は楽器が古くて、手広く商売をしていたスポンサーの人にお金を出してもらって一新した。ドラムは NSKB と書いてある。下呂の湯之島館に楽団で頼まれて何度か行った。

熊沢和美 (S23 生) :

昭和 48 年より、「カモネギ」というバンド活動をしていたが。青年団活動とは別物。明治座をフォークバンドのたまり場みたいにしていた。文化財に指定されたばかりで、初めは「若いチンピラは何をするかわからん」と、使わせてもらえなかった。昭和 48 年～52 年で定期公演もやった。(巻末資料)

佐藤正 (S28 生) :

音楽はカモネギが人気だった。明治座での「手作りの唄コンサート」は二階が落ちるかと思うくらい人が入った。

■青年団活動 (区分VI)

佐藤正 (S28 生) :

高校卒業した頃 (S47) は青年団演劇が盛んに行われていて、1 月から 3 月の寒い頃に、地区大会に向けて明治座で練習をした。明治座を使用する際は宿直が義務付けられていたから、こたつを入れて明治座で寝泊まりした。その時の青年団は演劇が主。意見発表の会 (弁論) はあったが、音楽はなかった。音楽やりたいやつはカモネギをやっていた。

内木哲朗 (S33 生) :

23, 24 歳 のとき (S56, 57) 青年団に入っ て、演劇の裏方をしてい た。
当時はまだ 80 人ほどいた。

(4) その他

■内木哲朗が加子母に来た時の心境

内木哲朗 (S33 生) :

子どもの頃は夏休みに遊びに来たが、屋敷は暗くていい印象ではなかった。24歳になる年(S57)に加子母に就職しに来た。それまでは3代(父・祖父・曾祖父)にわたって家を空けていた。曾祖母を東京に引き取ってからは完全に空き家だった。(S44~56)

和田富郎 (T15/S1 生) :

「若が来てあそこを継ぐそうだ」という噂を聞いて、本当に驚いた。子どもの頃、あの家は亡霊が出るという話を聞かされた。桑原(内木家の屋号)は雲の上の人というイメージがあったが、あの人は穏やかで、すぐになじんだ。

熊澤和之 (S14 生) :

山守の屋敷は人が住むところじゃないとずっと思っていた。当時、村役場の助役だったので、私が役場採用のための作文を書かせた。彼は好成绩だった。冗談で殿様と呼んでいる。

中島敏明 (S23 生) :

来てくれた時、僕も若かったということで、屋敷の囲炉裏のところで、若い連中がものを焼いて食べて飲んで、加子母をなんとか良くしようと夢を語った。

佐藤正 (S28) :

「桑原の息子が帰ってきたぞ」と言われて、あそこに住めるのか?と思った。都会生まれ都会育ちでよくなじめたと思う。

梅田周作 (S12 生) :

あの家に人に住んでもらえるということに対して、嬉しいという気持

ちがあった。村民としては全然知らない人が入るのではなく、加子母のゆかりの人が帰ってくるからうれしかった。人柄も良かった。

田口森雄（S9 生）：

加子母に移り住んで、加子母の人とは違う感覚でやってくれたのがよかった。

■ 囲炉裏会議

佐藤正 (S28 生) :

昭和 62 年～平成 3 年くらいかな。内木哲朗の屋敷でよくみんなで飲んだ。30 歳前後の人たちが 6～10 人集まって夢を語った。明治座は歌舞伎しかやってない時代だったから、僕ら加子母の人間からしたら明治座はお荷物的な存在だったが、外から来た内木哲朗くんは、明治座はもっと使われるべきだと熱弁していた。賛同者はあまりいなかった。そのうち秦雅文さんや本間希代子さんが来て、彼らが積極的に頑張っていた。囲炉裏での会議は活用委員会の前身という感覚。

■ 縁の下のキツネ (写真 5-4)

梅田周作 (S12 生) :

昭和 47 年に、明治座の縁の下には狐がいた。



写真 5-4 床下に住んでいた狐

(写真提供:梅田周作)

VII 明治座の持続的利用（平成7年～現在）

平成に入ると、岐阜県のIターン促進事業によりIターン者数名が加子母に定住した。²平成9年にIターン者が中心となって「加子母風起こし実行委員会」を組織し、行政とともに明治座で行うイベントを企画した。その結果、クラシックコンサートや落語会、各種公演の数々が明治座で開催された。

平成14年には風起こし実行委員会と明治座保護会（昭和21年～）が合流し、新たに「明治座活用委員会」が立ち上げられた。活用委員会は明治座の管理資金を生むためには、観光客による寄付が有効的なのではと考え、その年より実験的な通年開館を開始した。明治座を常に開館し、管理人兼案内人によって見学者に説明がされた。寄付金収集には、「割札」と呼ばれる板が使われた。³その割札による寄付は平成26年に約2000万円に達し、それをもとに岐阜県他から助成を受けることで、今回の「平成の大改修」が実現した。現在、活用委員会は明治座の管理・案内役の次世代への継承と、今後の運営システムの再構築を主な課題としている。

平成15年より、加子母歌舞伎保存会は、松本団升の娘の松本団女を振付師として招いている。また、現在衣装は松本衣装より借りている。

Ⅶ 聞き取り記録

(1) 管理・運営・組織

■加子母風起こし実行委員会

秦雅文 (S39生) :

自由に使えるアトリエが欲しくて応募した百数十人中2人のうち選ばれた。内木哲朗さんに村を案内されながら、「なにかできませんか」といろいろ仕事を任された。Iターン者と役場の企画部が中心となって、加子母風起こし実行委員会を立ち上げた。落語とか講演会とかいろんなことをやった。

■加子母住民の明治座離れ (区分Ⅶ)

内木哲朗 (S33生) :

現在は地元の関心が低い。観客のうち、加子母の人は2割くらいしかない。外から来る者にはすごく価値あるように見えるが、地元の人たちはそうでもないらしい。

秦雅文 (S39生) :

創作歌舞伎の役者をやった後すぐ、地歌舞伎のほうにも出ろと言われて出たが、客の入りが全然違った。頑張ったのにお客が少なくてがっかりした。加子母の人は歌舞伎に対する関心が低い。やっている人以外は関心がない。「なんとかしなきゃ」と外から来た人みんなで立ち上がった。(→明治座活用委員会)

下半郷が明治座を大事にしているように、上半郷には加子母大杉という観光資源があるから、一般住民(保存会や活用委員会に所属していない人)の若干温度差はある。梅村琢さん(S49生)

■明治座活用委員会

熊沢和美（S23生）：

明治座保護会のメンバーと、加子母風起こし委員会のメンバーと、加子母の教育委員会が集まって、どうしたらいいかという議論をした（明治座活用委員会）。

内木哲朗（S33生）：

実験開館は、「酔い覚めお園」や創作歌舞伎を通して、明治座を活用するために、組織づくりをしていかなければということになり、保護会と風起こし応援団（風起こし実行委員会の実働部隊）が協力して立ち上げた。区役として各区からも代表者を出してもらっている。

秦雅文（S39生）：

風起こし実行委員会が名前を変えた感じ。立ち上げた当初は外から来た人たちが頻繁に集まって話し合い、通年開館を決めた。合併後役場の人数が減ってからは活用委員会が自主的に動くことはなくなった。

梅村琢（S49生）：

歌舞伎やクラシックコンサートのときに手伝いをしてもらう。活用委員会としては年1,2回、報告会をする。本来ならもっと活用するために会議を動かしていきたい。活用委員会の高齢化が問題。若い世代に更新していけたらいいと思う。

■通年開館

田口森雄（S9生）：

実験開館は、何とか明治座をあける方法はないだろうか、興業をするか一般の人に使ってもらおうかと考えた。締め切っていたのでは中の傷みがひどくなるから毎日開けることを考えた。通年開館の主体となっているのは活用委員会。今後どうするかという会合の時に決まって平成14年に始めた。瓦替えの時期でもあり、にお金がかかるという

ことで 300 円の木札の寄付制度を始めた。

安江智夫 (S10 生) :

明治座の管理が保護会から活用委員会に移行した頃、「明治座の留守番に来てくれ」と言われた。当時の活用委員会の会長(田口森雄さん)は学生時代の先輩だった。最初は加子母の産業の話をしてくれと言われたが、徐々に明治座中心の説明になったね。

熊沢和美 (S23生) :

S48に瓦替えをして、屋根瓦を修理する時期に来ていた。それだけの修理費は出せんなど思っていたところ、屋根を修理するという話があって、検討委員会というのができた。こういう文化財的な価値のある歴史ある建物を耐震補強するにはどうしたらいいかということをお大学の先生や学生が決めてくれた。

内木哲朗 (S33 生) :

活用委員会が立ち上がった当時 (H14)、明治座の活用と修復が課題であったので、実験開館をはじめた。観光バスが来るようになったのは、バス会社同士のロコミに近い。通年開館の管理人として安江智夫さんを選んで本当によかった。彼の起用によりみんなが協力的になった。今後、後継者を選ぶことが課題である。

■今後の管理・運営について

熊沢和美 (S23 生) :

歌舞伎保存会が補助金をとるようにしているが、長い目で見ると明治座を管理するのなら、ちゃんとした入場券を作ったほうがいい。入場券を買ってしまえば、行ってみようと思う。それをきっかけに興味がいったりもするし、そのほうが僕はいいと思うが、あまり賛同が得られない。

今までの 100 年であったように、これからの 100 年も悪いときは地域のお荷物になるかもしれない。その時に、先代の明治座保護会が守っ

てきたようなことができるかが重要。スポットライトを浴びなくなった時に、明治座活用委員会がなんとかしなければと思っている。

内木哲朗（S33生）：

今回の改修を機に調査がされ、大学の先生方を中心に現状をまとめられた。文化財になってからも独自に改修をしてきたから、今回得られたデータを正式なものとして登録し直すことにした。そういう意味でも今回の改修は意義があった。今後、秦雅文さんを中心にトリエンナーレを企画している。そういう考え付かないような使い方をしていきたい。加子母には学生がよく関わってくれているから、何か新しい活用案を提案してほしい。

梅村琢（S49生）：

地域の人が使って盛り上がるならいいが、加子母の外から来た人が、自分たちが楽しむためだけに使うのは喜ばしくないと私は思う。行政としては、明治座を利用して地域にお金を落とす仕組みづくりができたらいい。そうなれば住民の意識も明治座に向くのではないか。今は下呂に向かうバスの時間調整の場になっているから、入場料を取るとした時に、それでも来てもらえるかが不安。現在、総合事務所は手が回らない状態である。

（2） 娯楽・催事

■ 創作歌舞伎

中島敏明（S23生）：

加子母大杉の近くに文覚上人の墓がある。そのいわれを聞いてプロが台本を作った。それが「袈裟と盛遠」。地元の役者も加わって演じた。

内木哲朗（S33生）：

平成8年に企画部に配属されたタイミングで、女優渡辺美佐子が出演する「ネオリアルカブキ～酔ざめお園～」という公演があった。ドキュ

メンタリー番組としてテレビカメラも入った。このイベントをきっかけに歌舞伎フォーラム（H9～12）が開かれるようになり、その一環として創作歌舞伎「袈裟と盛遠」（H9～11）が企画された。1年目は第一部をプロが演じる。2年目は第一部を村民が、第二部をプロが演じる。3年目は第一部から第三部まで合同で演じる。これをきっかけに加子母歌舞伎が注目されるようになり、少し活性化した気がする。

秦雅文（S39生）：

創作歌舞伎に誘われた「手伝ってくれませんか」と言われて大道具をやった。次の年は役者をやらされた。

本間希代子（S48生）：

「森の交流大使」1年目（H9）から歌舞伎で役者をやった。団升先生の「はいそこでちょーん」という指導で最初は戸惑った。当時は客席の床が見えるほど人の入りは少なかった。

■クラシックコンサート（H10～）

秦雅文（S39生）：

当初は田中千香士先生が山村の子どもに本物の音楽を聴かせたいということで始めた。始めは手伝いをするだけだったが、先生が平成21年に亡くなってからは、クラシックコンサート実行委員会を立ち上げて、主体的に試行錯誤しながらやった。ちょうど僕が来た年（H10）に始まった。「手伝ってくれませんか」と言われてセットの手伝いをしたら、いつの間にか今では実行委員長になっている。

■ 18代目中村勘三郎襲名披露公演 (H18)

本間希代子 (S48 生) :

このときはクーラーが入ったし、席に番号がふられた。裏の控え棟にのれんがかかって松竹の楽屋みたいになっていた。早朝から明治座付近に入り待ちのファンが集まっていた。加子母は先行販売をして、とても賑わった。

(3) 青年団活動

■青年団活動（区分Ⅶ）

内木哲朗（S33 生）：

現在、青年団は予算の関係上名前のみ存在し、活動はない。総合事務所職員の田口幸子が大將ということになっている。国道が開通してから（全線開通はH3）、若者が外に流出するようになり、急速に廃れていった。

(4) その他

■明治座かわら版

本間希代子 (S48 生) :

平成9年に、森の交流大使2人で始めた一枚新聞。歌舞伎の公演のときに役者のインタビューや演目の解説を載せた。合併してから (H17～) はかしも通信に変わった。

■かしも通信社 (H17～)

秦雅文 (S39 生) :

合併前の加子母村広報誌を受け継ぐように始まった。原ゆうみさん、本間希代子さんと僕がメインメンバー。1人を除いてほとんどが加子母外から来た人でやっている。総合事務所で刷ってもらう代わりに無料で毎月発行していて、かしも通信は全戸に行き渡るようになっている。合併後、僕にとっては、地域住民とのふれあいのきっかけになっている。

第5章 註

¹大正 11～平成 19 年（享年 85 歳）。歌舞伎振付師であり、平成 9 年に岐阜県重要無形文化財に認定された。

²森の交流大使事業」20 代の女性を山村に招き生活をさせることで地域の活性化を図る。任期は 2 年で、平成 7～12 年に実施された。「山村芸術工房整備事業」芸術家を招き「アトリエ村（平成 9 年建設）」に住ませ芸術交流による地域振興を図る。平成 10 年～入居を開始した。これらの事業により 11 名が一時滞在し、そのうち 4 名が現在も定住している。

³ 1 枚 300 円の木札。半分に割り、片方は持ち帰ってもらい、片方は明治座に飾った。

第6章 まとめ

6-1 まとめ

明治座の歴史のうち、絵本製作において重要と考えられるシーンを抽出し、図 6-1 にまとめる。

明治座の始めの 100 年（明治 27 年～平成 5 年）は、2 度の廃絶の危機を地域住民の結束により乗り越えてきた。明治 26 年に地域住民により発案・建設され、娯楽施設として大いに利用された。しかし、戦時中に軍事倉庫として手荒く利用されたため、建物が激しく荒廃してしまう（危機 1）。戦後兵役から帰還した若者により「明治座保護会」（組織 1）が立ち上げられ、青年団活動や映面上映会が賑わいを見せた。高度経済成長の波を受け、催事施設としての需要が低下すると、建物解体の話題があがった（危機 2）。文化財指定を契機に「加子母村歌舞伎愛好会」（組織 2）が発足し、地芝居が復活を遂げた。これが明治座の始めの 100 年である。

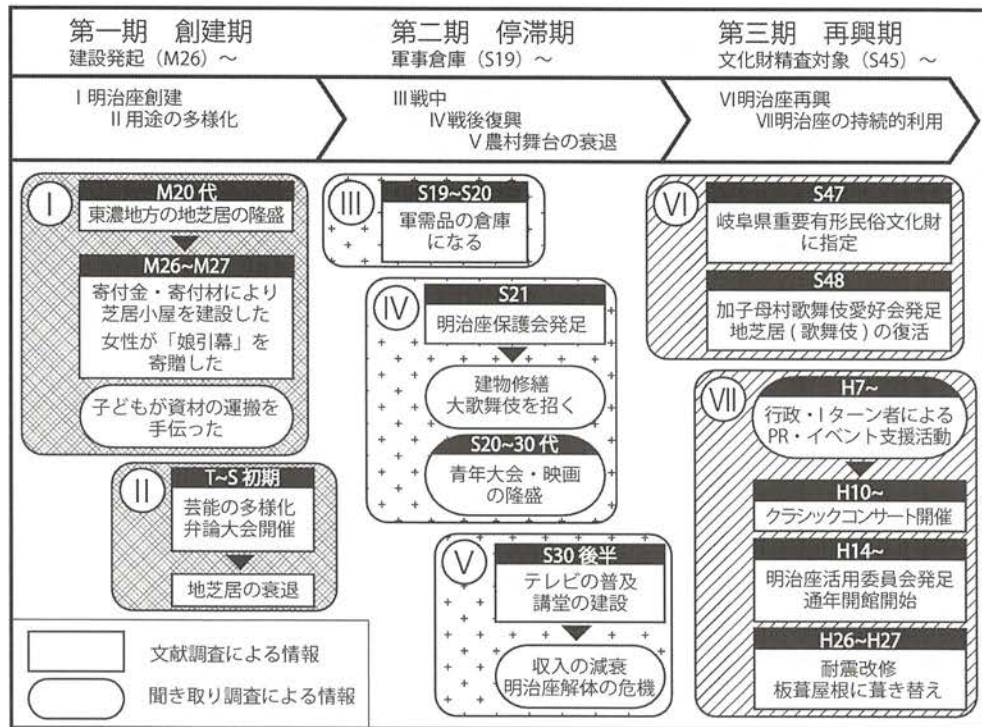


図 6-1 明治座の重要事項まとめ

明治座の次の100年（平成6年～）に向け、近年積極的に活動してきたのは、内木哲朗加子母総合事務所所長やIターン者などの外部から来た人間である。彼らは保守的となってしまった明治座保護会とともに「明治座活用委員会」を組織し、今回の改修工事へとつなげた。

行政職員や活用委員会会長への聞き取りにより、明治座の次の100年のためには若い世代への引き継ぎと意識の向上が必要であると確認された。また、加子母住民への聞き取りにより、明治座が頻繁に利用してきた人々の生の声を記録することができた。これらを絵本により子どもたちに伝えることで、将来加子母住民の明治座に対する意識を高めることにつながると思われる。

謝辭

本研究を進めるにあたり、最後までご指導いただいた藤岡伸子教授に、心から感謝いたします。先生から「歴史絵本製作のための調査」というテーマを与えていただいたことで、目的や方針に関しては、ほとんど迷いなく研究を進めることができました。

明治座の歴史を調査するにあたり、聞き取り調査にご協力いただいた皆様には、初見にも関わらず快く受け入れてくださいました。心より感謝いたします。写真や資料を提供していただきました梅田周作さん、熊沢和美さん、田口森雄さんには重ねて感謝を申し上げます。

また、加子母総合事務所職員の皆様には、事前連絡もせずに突然押しかけてしまったにも関わらず、大変親切にしてくださいました。メールにも早急に対応してくださり、大変助かりました。ありがとうございました。

藤岡研究室の先輩方には、多大なるご協力を賜りました。梗概の作成では、細部にわたり厳しく添削していただき、1学年2学年の差の大きさを実感しました。本論とプレゼン作成にあたりましては、徹夜でご協力いただきました。ありがとうございました。特に藏野先輩と佐野先輩には、研究内容の把握と的確なアドバイスをしていただきました。添付資料から本論の清書、プレゼン資料に至るまで、任せきりでごめんなさい。大変お世話になりました。

同期の皆さんには、進級した時から、とても刺激を受けていました。私は、一足早く社会人になります。就職活動の自己分析で、ドツボにはまらないように気を付けてください。

取り掛かりが遅かったこともあり、研究結果に関しては、「聞きそびれた。調べきれなかった。」等、多少悔いが残ってしまいました。しかし、絵本製作に役立つ資料を作成できたと思います。本間希代子さん、すてきな絵本をお願いいたします。

平成 27 年 12 月 9 日

日高 史帆

参考文献

有沢広巳監修，山口和雄，服部一馬，中村隆英，宮下武平，向坂正男編集
『日本産業史 1』（日本経済新聞社，1994）

—————. 『日本産業史 2』（日本経済新聞社，1994）

飯田勇介『近世美濃国裏木曾三ヶ村の山村支配に関する研究-山守制度を中心
として-』（京都大学工学部建築学科卒業論文，2009）

五十嵐仁，金子勝，北河賢三，小林英夫，牧原憲夫，山田朗編集『日本 20
世紀館』（小学館，1999）

一般社団法人プラスチック循環利用協会，全国小中学校環境教育研究会監修，
プラスチック図書館ホームページ.
http://www.pwmi.jp/tosyokan/02_rekisi.html，（2015-12-02）.

景山正隆「沿革と芸能」（1974）『加子母の農村舞台-明治座の建築と沿革-』（加
子母村教育委員会，1993）

景山正隆『愛すべき小屋』（冬樹社，1990）

加子母村誌編纂委員会編『加子母村誌』（岐阜県恵那郡加子母村，1972）

加子母村文化財保護審議会『加子母の歴史と伝承』（加子母村教育委員会，1983）

—————. 『加子母の歴史と伝承・続編』（加子母村教育委員会，1990）

柏木博，小林忠雄，鈴木一義編集『日本人の暮らし-20世紀生活博物館-』（講
談社，2000）

木村茂光『日本農業史』（吉川弘文館，2010）

公益社団法人京都モデルフォレスト協会，情報誌『以森伝心』第11号（2010年8月）～『森と木のナルホド講座 第七回』．
<http://www.kyoto-modelforest.jp>, (2015-12-02).

高村寿一，小山博之編『日本産業史3』（日本経済新聞社，1994）

—————.『日本産業史4』（日本経済新聞社，1994）

只木良也『新版森と人間の文化史』（NHK出版，2010）

田中浩子，本間希代子（編）『加子母人—加子母村に生きてきた人たちの人生。』（かしも通信社，2010）

角田一郎編『農村舞台の総合的研究—歌舞伎・人形芝居を中心に—』（桜楓社，1971）

角田一郎『農村舞台探訪』（和泉書院，1994）

麓和善「明治座の歴史的価値」『加子母明治座耐震改修調査研究報告所』（加子母明治座耐震改修検討委員会，2015）

文化庁監修『芸術祭五十年 戦後日本の芸術文化史』（ぎょうせい，1995）

山口昌男監修『まるごとわかる『モノ』のはじまり百科2 暮らし・生活用品』（日本図書センター，2004）

—————.『まるごとわかる『モノ』のはじまり百科3 機械・電化製品』（日本図書センター，2004）

脇野博『日本林業技術史の研究』（清文堂，2006）

『平成25年度森林・林業白書』（林野庁，2013）